

ジンメルと「個人と社会」問題——社会的なものの興亡（その3）*

厚 東 洋 輔**

I 社会主義と社会学の制度化

1890年は「社会的なもの」の歴史を辿るときの一つの画期をなす。というのは「正統カトリズムが『社会問題』の存在を公式に認めるのは、1891年の教皇レオ13世の回勅によってである」からである（田中、2006：115）。

1890年に行われたドイツの帝国議会選挙は、社会主義政党が躍進し、「社会民主党」が議会の一割弱を占めるようになったことで有名である。そのときの第一党はカトリック政党で、全体の三割弱、社会主義政党の三倍程度の支持を集めていた。宗教改革の母国であるドイツにおいてすら、カトリシズムは19世紀の末になっても最も強力な政治勢力であり続けていたのである。

エスタブリッシュメントの中核に位置するカトリシズムからすれば、19世紀における社会問題の興隆は一時の流行すぎず、時の流れの中で「疑似問題」であることが明らかになり雲散霧消するか、あるいは世俗的力によって適切に解決されるかによって、いずれにして消え去る運命にあるものと遇されていた。「社会問題」の出現したのが1830年代。そこから約半世紀以上にわたり、社会問題は連綿とその存在を無視されてきたのである。こうしたネグレクトの姿勢が、公式に撤回されたのが、ようやく19世紀末の1891年。それ以前では、「社会問題」を議論する者はカトリシズムのなかでは破門を覚悟せざるを得なかった。

19世紀の後半には、様々な「社会問題」が勃発し続け、その解決に志向した数々の制度改革がつつぎと実現されてきた。選挙法の改正、労働組合法の制定、ストライキによる賃上げや労働条件

の改善等々、こうした「現実」に直面すると、「社会問題」は一時の流行でも、気の迷いでもなく、この世に厳然と存在する一つの問題と認定せざるを得ない。半世紀以上にわたる「社会運動」の成果として、「社会問題」は19世紀の末に、近代社会を構成する制度的要素として伝統的勢力によってようやく公認されるに至ったのである。

「社会問題」の公認に伴い「社会主義」の位置づけも大きく変わらざるを得ない。「社会主義」は、本来、「社会問題」を解決するために、社会運動を担うマイノリティによって作り上げられた主義主張である。闘争場裡に自生的に生成してきた主義主張だけに、様々なヴァージョンを孕んでいた。19世紀後半期における社会主義の課題は、様々な運動体を横断するような統一的な組織を作り上げることにあった。エスタブリッシュメントに与える脅威を極大化するには、中央にコントロール機関を構築し、運動体の「分裂」状態を克服することが最良の戦略と信じられていたからである。

ドイツでは、1875年に結成された「社会主義労働者党」は、90年の帝国議会選挙において142万票35議席を獲得し、その余勢をかりて社会主義者鎮圧法を撤廃させることに成功した。そして「ドイツ社会民主党」と改称し、現在に至るまで、有力な政党としての地歩を保ち続けている。

イギリスでは1880年代に「社会主義思想の復活」の兆しが見られ（フェビアン協会、社会民主連盟の結成）、こうした力を基盤として1900年に「労働党」の母体となる「労働代表委員会」が結成された。フランスでは、90年代に行われた社会主義政党の統一化の動きは、結局のところ失敗した。それは「社会主義に近接しながらも異なる理

*キーワード：相互作用、個人の構成、社会の構成

**関西学院大学社会学部教授

念)として「急進派」が政治勢力として有力なものであり続けたからであろう(田中、2006; 234)。「社会主義的」と「社会的」の間に微妙な線引きが現在に至るまで存在している。

全国的な規模の社会主義政党の形成は、社会主義の性格を大きく変容させた。宗教の比喩を用いるなら、19世紀中葉における「特殊な少数者のクラブ」を意味する「カルト」的なものから、19世紀末になると「教会」的なものとなる。「教会」の「聖職者」(=政党の幹部)のおかげで、社会主義の教義と儀礼の体系化、形式化が大いに進展する。

社会学においても「専門科学」として自己を確立し、大学の中に「講座」を確保しようという動きが、19世紀末になるときわめて顕著になる。こうした動きの背景をなすのが、大学が教養教育の場から専門教育の府に向かう変貌の過程である。19世紀は科学の専門化が進展し、大学のなかで専門教育の場所が争奪的となる。19世紀初頭の「法学」から「法律学」への専門科学化を皮切りに、19世紀に後半には経済学の専門科学化が進行した。この過程の仕上げが1880年代に繰り広げられた「方法論争」であることは、すでに述べた通りである。

社会学においても、在野の学問からアカデミックな科学へと、総合的な学問から専門的な科学へと作り替えることが熱心に求められる。こうした社会学の「制度化」の動きの中で、避けて通ることの出来ない論点は、社会主義と社会学をいかに区別するかである。分離するためのモデルを提供したのが経済学の方法論争であった。それを引き継ぐようにして、1890年は、社会主義と社会学とが、それぞれ別個にアイデンティの追求を徹底化し、別々に「制度化」が押し進められ始めた時代である。社会主義が全国的な政党組織の形成に成功し、首尾よく一つの政治的勢力となることができた。社会学の方も、社会主義との自然発生的な共棲関係にまどろんでいることはできない。社会学もまた、全国的あるいは国際的規模の「教会」(学会)を作り、その教義と儀礼を統一化することが焦眉の急となる。社会学の発展は、こうして新しい局面へと突き進むことになったのである。

II 集団の拡大と個性の発達

専門科学としての社会学をめざす動きの劈頭を飾るのが、ゲオルグ・ジンメル(1890年)の作品『社会分化論：社会学および心理学的研究』Über soziale Differenzierung: Sociologische und psychologische Untersuchungen (GA2)である。

ジンメルはベルリンの中心街で1858年に生まれた。父は成功したユダヤ系商人であったが、ユダヤ教からカトリックに改宗しており、また母はプロテスタントである。プロテスタントとして洗礼を受けたゲオルグは、ほとんどユダヤ系という出自を重視することもなく、婚姻相手もプロテスタントのユダヤ人であった。ジンメルの生まれ育ったベルリンは、統一されたドイツ帝国の首都として急激に発展をとげ、人口は1848年の40万人から1914年には400万に急増し、巨大都市へと変貌していった。ジンメルは学生時代、当時の慣習に反して諸大学を遍歴することなく一貫してベルリン大学で学んだ。56歳になってようやく大学教授のポストを得てシュトラスブルクに居を移すまで、ベルリンに住み続けていた。彼にとってベルリンでの生活はきわめて快適だったようである。彼は次のような言葉を残している。

「世紀の転換期とその後の年月にかけてのベルリンの大都市から世界都市への発展は、私自身の最も激しく最も大きな発展の時期と一致している。(中略)、おそらく私は他の都市においてもまた価値あるなにごとかをなしたであろうが、私がここでの年月の間に成し遂げた特別の仕事は、疑いもなくベルリンという環境と結びついていた。」(H. Simmel, 1976; 居安、2000: 12-13)

ジンメルの社会学は、ベルリンでの生活体験に染め上げられている。ジンメルにとって社会学は、自分の生活体験を認識し、理論化するためにかけがえのない学問であった。終生社会学を忘れることはなかった。しかし自己の生活体験を対象化したいという欲望は、ジンメルの幅広い知的関心のほんの一部をなすものにすぎない。その限りで、社会学をもって、彼の知的営為の全領域を覆い尽くすことは出来ない。社会学は、知的な遍歴を繰り返すジンメルにとって、己を取り戻した

めに間欠的に立ち戻るべき学問的な帰省先を意味した。

ジンメルは、専門科学としての社会学を確立しようとする自己の努力を、19世紀における「社会的なもの」の興隆と、不可分のものとして位置づける。

「こうして社会学という科学が掲げるのをつねとする要求は、19世紀において大衆が個人の利益に対して獲得した実際の勢力を、理論的に継承し反映することなのである。」(1908, GA11:13; 上, 11)

この場合の「社会学」とは、専門科学以前の社会学、すなわち社会科学一般をさす。

「個人主義的な見方の克服は、歴史科学と人間の理解全般が現代において成し遂げた最も意味深長な、最も重大な進歩と見なされるのがつねである。私たちは、以前に歴史の画面の前面に出ていた個々人の運命の代わりに、種々の社会的諸勢力や集団的な運動を、真に有力で決定的なものとして支持する。すなわち人間の科学は社会の科学になったのである」。(1894, GA5:52; 訳, 157)

19世紀は、個人主義的な「人間の科学」にかわり、集団主義的な「社会の科学」へと学問の覇権が移り変わった時代である。こうした地殻変動の推進力となったのが、「個人の利益」に対し「大衆」が戦いを挑んだ「社会問題」であった。

社会勢力・社会運動を導きの糸として、歴史の動き分析するための装置として練り上げられたのが〈社会の階級モデル〉である。

「階級の作用は、諸個人が知覚可能な意義にではなく、『社会』という存在の中にあり、階級は、実際の勢力関係の帰結を通して、理論的な意識によって身近なものとしてされるが故に、思考作用が直ちに認めるのは、一般にどんな個人的な現象も、その人間的な環境圏からの測り知れない影響によって規定されるものだ、ということである。」(1908, GA11:13-14; 上11-12)

ジンメルの思考を規定しているのは、個人主義的な「人間の科学」に対立する集合主義的(社会主義的)な「社会の科学」、という対比である。「社会主義」は、集合主義的な「社会の科学」として、認識体系へと焦点が絞込まれ、その本質が

押さえられている。

ジンメルの社会学論の課題は、こうした「社会主義」から、一方では、そのメリットを引き継ぎ、他方では、そこから身を引き離して、一つの専門科学にすることにあつた。こうした課題を果たすための方法論的考察が、『社会分化論』の序論「社会科学の認識論のために」である。

ジンメルはカント論で学位論文を仕上げた人らしく、人間の科学と社会の科学の対立を、個と普遍をめぐる論理学の問題群へと引きずり込む。「社会」は、個人の単なる総和にすぎない「名目」なのか、それとも総和以上の固有の「実在」なのか。個人主義と社会主義(集合主義)の対立を、社会名目論と社会実在論という常套的な対比に持ち込むような顔をして、ジンメルは読者をあっと驚くような地点へと連れ去る。

「社会」のような普遍概念を個々の現象の総和に分解することは、現代の精神傾向の主要な目標の一つである。その限りで、社会主義的な「社会の科学」の歴史的使命は終わったとする、個人主義の言い分は正しいように見えるかもしれない。「しかし、個人主義が社会の概念に対するこうした批判を向ける場合、私たちはなお一段の反省を深め、個人主義にも同時に自己自身に判決を下すことを知る必要がある。というのは、認識作用が最後の実在のみを考慮するとすれば、個々の人間もまたそのような認識作用の要求する絶対的な統一体でないからである。」(1890, GA2:126-7; 訳, 15)

社会が名目だとするならば、個人もまた名目である。社会名目論 vs. 社会実在論という対比の裏側にある、個人実在論 vs. 個人名目論という対立もまた同時に問われなければならない。社会主義が「社会」の実在性に無反省に寄りかかっているように、個人主義は「個人」の実在性を無反省に前提している。両者は同時に批判されてしかるべきである。ジンメルは「人間の科学」と「社会の科学」の両方を棄却し、「第三の立場」へと歩を進める。新しい地点に専門科学としての社会学を樹立し、これまでの対立を止揚しようとする。

個人も名目ならば社会も名目である。実在するのはただ一つ「諸部分の相互作用」のみ。統一化に客観性を与えるのはただ一つの根拠、「それは諸

部分の相互作用である」(1890, GA2: 129; 訳, 17)。

新しい「社会学」の固有な対象は「相互作用 Wechselwirkung」である。「社会は、その諸部分の間に実在する相互作用に対しては、たんに二次的であるにすぎず、結果であるにすぎない」(1890, GA2: 130; 訳, 18)。「社会」が認識上の構成物にすぎない点を見落とししたところに、「社会の科学」の非科学性は存する。

社会学は、社会という統一概念を所与として、社会の諸規定という形で、諸部分の関係や相互作用を明らかにすることは出来ない。むしろ諸部分の関係や相互作用から「社会」は構成されるべきである。社会とは相互作用のまとまりに対する名称にすぎず、そうした相互作用の程度に応じた相対的な概念にすぎない。

「人間の科学」の非科学性は、「個人」という概念もまた「相互作用」から構成される二次的な構成物にすぎない点を見落とししたところにある。「個人にただ社会的な糸の交点しか認めないような歴史的・社会的な世界観によって、古い個人主義的な世界観が取って代わられる」というのが現代の潮流である(1890, GA2: 158; 訳, 44)。相互作用を「糸」あるいは「系」で言い表すなら、個人とはこうした糸あるいは糸が交錯する点としてイメージすることが出来る。

個人という概念は、「原子」に相当する存在として分析の端緒に与えられるのではなく、「相互作用」から二次的に構成されるべきである。

社会主義と個人主義、社会の科学と人間の科学、という二項対立の乗り越えをめざすジンメルの構想では、社会学的研究には二つの局面が存在することになる。

まず第一に、分析の出発点をなす相互作用を認識対象とする局面(社会学的研究の第一局面)。第二にそれに後続する、相互作用から「二次的に」構成された「社会」あるいは「個人」という概念に関わる研究の局面である(社会学的研究の第二局面)。

最初に「自我」あるいは「他我」という存在を想定し、こうした自我と他我の間の行為のやり取りから「相互作用」が導出されるのではない。まず最初に存在しているのが相互作用であり、「個

人」は相互作用から二次的に析出されるのである。

『社会分化論』においてジンメルがとりわけ論じたかったのは、社会学の第二の研究局面、すなわち「個人」と「社会」という二次的な概念を用いて、両者の関係を論じることにあった。「分化」という相互作用に関わる特性から、いかなる社会像および個人像を引き出すことが出来るのか、そしてこの社会像と個人像との間には、どのような相互規定関係があるのか、というのがこの著作の直接的なテーマをなす。「分化 Differenzierung」という概念を社会認識に導入するという試みは、必ずしもジンメルの独創ではない。スペンサーの有名な言葉「分化は進歩 differentiation is progress.」を引くまでもなく、「分化」という概念は「社会体」の全体的特徴、その歴史的趨勢を明らかにするために、19世紀後半、多くの論者によって用いられていた。こうした潮流に棹さしながら、ジンメルは自己のオリジナリティーを、次の点に求めている。

「社会学的な思考に最初に対象として与えられた集団全体の運動とは逆に、以下の考察は、実質的には個人の地位と運命とを取り上げ、個人を他の個人とともに社会的な全体に結合する相互作用によって、いかにしてその地位と運命が与えられるのかを示そうとするものである。」(1890, GA 2: 138; 訳, 25)

『社会分化論』のテーマは、相互作用を仲立ちとして、(全体としての)社会と(部分としての)個人の相互規定性を論じることであった。そのタイトルからは予測されるように「分化」は社会の平面で追究されるのではなく、個人の平面で社会分化の帰結を議論することが課題となる。〈社会分化の人間の意味〉を問うことこそが、「社会学の科学」あるいは「人間の科学」でもなく、「社会学」がいま=ここで構想される所以であった(*)。

*その限りで「社会学的ならびに心理学的研究」という副題は当時の言葉遣いからすればやむを得ない面があるにしろ、ジンメルの真意を正確に伝えるものではない。「社会学的」には「社会主義的」とは異なり、「心理学的」という視座は最初から含み込まれており、社会学と心理学とは、二項対立にはなりえないからである。

分化の問題を相互作用の平面で追求したのが第五章「社会圏の交差」である（社会学の第一局面）とすれば、分化が社会と個人の関係性にいかなる影響を与えるかを追求したのが第三章「集団の拡大と個性の発達」である（社会学の第二局面）。

「集団の拡大と個性の発達」という題目は、ジンメルの終生のテーマで、1888年に雑誌論文として初出されたあと（オリジナルなタイトルは「社会倫理的な諸問題への所見」、増補改訂され『社会分化論』の第三章に収録された。その後2008年に『社会学』が編集されるとき、再び加筆修正され、掉尾を飾るものとして最終章に収められている。

ジンメルによれば、個人も社会も相互作用から、同じ演算方式に従い導出することが可能である。方法論的パラレリズムをはっきりとさせるために、導出（構成）の論理を図式化しておこう。（この図式は、私の議論の道筋を明確にするために、厚東の責任によるものである。）

$f W$ （相互作用） $\rightarrow G$ [社会] ……①

$f W$ （相互作用） $\rightarrow I$ [個人] ……②

G [社会] $\div I$ [個人] ……③

分化は、相互作用の平面では、社会圏の交差を帰結する。

歴史の始まりでは、家共同体がすべての社会圏を自らのうちに含み込んでいた。家共同体は、家族（血縁集団）であるばかりでなく、国家（政治集団）でもあり、企業（経済集団）でもあり、教会（宗教集団）でもあり、学校（教育集団）でもあった。分化の進展とともに、家共同体に含まれていた機能は、一つずつ別の集団に付託されようになった。複合的な機能の担い手である「社会」は、社会分化の進展とともに、家共同体という一つの集団をもって代表されることが次第に困難となり、機能的に単一化した社会圏が複数寄り集まって、そこで始めて出来上がるとイメージされるようになる。「集団」でもって「相互作用」を代表させることが許されるなら、相互作用から社会を導出する演算は、歴史的に次のように変化することになる。

①： $f W$ （家共同体） $\rightarrow G$ [原始社会]

①： $f W$ （家族、国家、企業、教会、学校等々）

$\rightarrow G$ [近代社会]

社会圏が単一機能化すれば、圏域に属するメンバーの数は増加する。多数のメンバーを擁する社会圏は、空間的見れば、大きな領域を占める。集団の大規模化とは、メンバーの多数化と同時に、範囲の広域化を意味する。分化が「社会」概念に及ぼす最も明白な影響は、社会の大規模化すなわち「大社会」の成立である。ジンメルはこの趨勢を「集団の拡大」と名付けた。

社会圏の交差の増大という傾向は個人の概念にどのような影響を与えるだろうか。原始社会では、人は家共同体という一つの社会圏のなかで生まれ育ち死んでいった。それに対して近代社会では、人は様々な社会圏に属しながら生きていく。家族に産み込まれた人も、学齢期になれば学校に属するようになる。大人になれば、働くために企業に属し、参政権によって国家の活動に参加する。宗教的必要的のために人は様々な教会（宗教団体）に所属するようになる。人々は、所属集団が異なれば、異なった相互作用のもとにおかれる。所属集団が異なれば、そこで形成される「個人」は異なるものとなる。相互作用から個人を導出する演算は、歴史的に次のように定式化されるだろう。

②： $f W$ （家共同体） $\rightarrow I$ [原始社会の個人]

②： $f W$ （家族、国家、企業、教会、学校等々）
 $\rightarrow I$ [近代社会の個人]

原始社会における個人は、同じ家共同体に属するが故に、類似の「人格」を有していたと考えられる。社会分化が進めば、人は様々な集団に属さざるを得ない。人の所属する集団の種類は、一人ずつを見れば、実に様々である。教育の程度に従い、人の所属する集団は様々。宗教活動は人々の自由に任され、どの教会に属しても良いし、そもそも教会に属さない権利も有する。社会圏の交差という事実は一色としても、一人の人格の上で交差される社会圏の種類に着目するのなら、その組み合わせが醸し出す色彩は、各人各様といわざるを得ない。

ジンメルによれば「人格が個性的になるのは、種属の要素がどんな量と組み合わせで人格の中で一緒になるかという、その量と組み合わせの特殊性を通じてなのである」（1890, GA2:241；

訳, 123)。人の人格のあり方は、その人の属する社会圏の種類を見れば明らかとなる。分化が進展すれば、人の属する社会圏の組み合わせは多種多様になる。ということは、人々の人格も多種多様になるということである。それ故次のように結論することが出来る。すなわち〈社会の分化は人々の個性の伸張に貢献する〉と。これを演算式で表せば次の通り。

③: G [原始社会] \div I [原始社会の個人].

③: G [近代社会] \div I [近代社会の個人].

「個性の発達と社会的な関心との間の関係についてしばしば観察されるのは、前者の高さが後者の及ぶ圏の拡大と歩調を合わせるということである」(1890, GA2: 169; 訳, 54)。

「集団が拡大すればするほど個性は発達する」、逆に言えば、「個性が発達すればするほど集団は拡大する」は、ジンメルの脳裏に、終生、鳴り響いていたモチーフと思われる。この命題は、多分、大都会ベルリンで暮らすジンメルの生活体験に由来するものであり、彼にとっては否定し難いリアリティがあったのであろう。私の考えでは、「分化」をキー概念に選び出し『社会分化論』を最初の著書として書き下したのは、社会の拡大と個性の発達との間の相互規定性を理論的に(「学」として)明らかにするためにであった。「社会学」は、ベルリンにおける自己の生活体験を認識体系へと整形し直すために、どうしても必要な「新しい」学問だったのである。

Ⅲ 形式社会学の問題

1894年に発表された「社会学の問題」は、社会学の専門科学化を押し進める上で里程標的業績である。この論文は、通常「形式社会学」を提唱したものとして名高いが、そうした先入観に囚われることなく注意深く読み直すことにしよう。

この論文は『社会分化論』の第一章「社会科学の認識論のために」の論じ直し、というのが基本的性格である。

「最広義の社会は、若干の諸個人が相互作用に入った時点で存在することは明らかである」(1894, GA5, 54; 訳, 160)。

『社会分化論』の段階ではやや混乱していたの

は、「相互作用」的見方が直ちに(狭義の)「社会学」を特徴づけるのではないかと考えていたふしがある点にある。冷静に考えれば「相互作用」は「社会の科学」の全対象領域において生起しているはずである。認識者がそれに気づいているかどうかはともかく、事実として存在していることは疑いえない。ここでジンメルは新たな問題に直面することになる。「社会学」を「社会の科学」から括り出すために、相互作用の中に社会学が取り扱うべき固有の領域が画定されねばならない。

1894年論文では「相互作用 Wechselwirkung」は「社会化 Vergesellschaftung」と言い直される。こうした言い換えは多分、「相互作用」が物質間の影響・効果の相互交換を意味する「自然科学」に由来する言葉で、人間と人間との「相互作用」を表すには(ドイツ語を母語とするものには)若干の違和感があることに由来するだろう。物質ではなく人々の間の影響・効果の交換を限定的に指し示すために「社会化」Vergesellschaftungという言葉が選び直されたのだろう。「社会化」とは「諸個人が共存的・互酬的・並存的に存在する状態」(1894, GA5: 57; 訳, 169)のことである。

* 英語で「相互作用」を意味する interaction にはこのことは当てはまらない。インタラクション interaction は、文字通り action の交換を意味するが、action は人間を始源とする活動・効果を第一義とするからである。物質間に見られる効果の交換関係をインタラクションと呼ぶのは、人々の間にみられる表現形態からの転用と考えられる。ジンメルが最初から相互作用を指示するのに「インタラクション」を用いていたなら、それを「社会化」と言い直す必要はなかったと思われる。

「社会の科学」は社会化一般 Vergesellschaftung überhaupt を取り扱う。歴史学は「政治的に重要なものという概念」に従い選び出された現実を取り扱う。「社会学」は、「特殊=社会的なもの das Spezifische - Gesellschaftliche」(GA 5: 54; 訳, 160)、「端的に社会的 bloss gesellschaftliche というモメント」(GA: 57; 訳, 163)のみを取り扱わねばならない。

社会学が固有に取り扱うのは「社会化一般」ではなく、「社会化そのもの Vergesellschaftung als solche」である。「固有に社会的な諸力・諸要素

そのもの」へと純粹化された「社会化そのもの」とは、「社会化の諸形式 Socialisierungsformen: Formen der Vergesellschaftung」のことに他ならない (ibid. 54; 訳, 160)。こうして〈社会の純粹理論〉(「抽象化の権利のある領域」(ibid. 55; 訳, 161))を構築するためのキーワードとして「形式」という概念が選び出されるのである。「社会化一般」は形式と内容が一体のものとなって現実化した経験的事実である。社会化一般のもつ「内容」あるいは「素材」を不問にし「形式」だけに着目すると「社会化そのもの」を抽象化することが出来る。それ故、専門科学としての社会学は「形式」社会学と名付けられる。

ところで「形式」は、「内容」あるいは「素材」と対比される言葉で、とりわけカントが用いることによって哲学史上有名になった概念である。19世紀末はカントの見直しが盛んになった時期で「新カント派」は、当時における最新の思想潮流であった。「形式」をキーワードに「形式社会学」という名の下に専門科学としての社会学を規定しようとしたジンメルを試みは、こうした思想動向にうまくマッチした。この命名は、社会学をアカデミックに権威づける上で多大の貢献をしたことは認めざるをえない。しかし、一世風靡させる代わりに、誤解をまき散らした。「形式」をもって「社会学」を限定しようとするジンメルを試みは功罪半ばしたといわざるをえない。というのは「形式」は、日常用語では、事象の外枠あるいは固定化された形態を意味し、それと対比的に用いられる「内容」は、事象の具体的な内実を示し、事象の本質的契機は内容の方にあると解されるのが通常だからである。形式と内容、どちらが大切ですかと問えば、十中八九、内容という答えがかえってくる。

ジンメルはカント論を学位論文にもつ「哲学者」であるせいか「形式」についてことさらに定義することはない。〈周知のように〉といった調子で、事実を用いた「例示」でことを済ませてしまう。「哲学者」ではない私には、例示からジンメルが「形式」に込めた真意を推測する以外に術はない。

社会学の常套的理解では社会化の形式と言えば「敵対」とか「競争」を意味する。こうした現象

を取り扱う際に、ジンメルは次なような点に注目せよという。「こうした敵対と競争もまた、人々が相互接触する際に人々のうちに展開されるような諸力を示し、この場合の動機と内容がはなはだしく多種多様でありながらも、どのようにして同じ関係様式が成り立つ余地があるかということを認識するためには、そうした諸力の様式と源泉それ自体が研究されなければならない。」(ibid. 58; 訳, 170-1)

敵対や競争を分析する上で大切なのは、人々の相互接触という原点に立ち返りながら、その力の様式と源泉を探求することである。

また「社会化の諸問題」の研究方法について次のように述べている。「例の歴史的複合体の内部に見られるある特殊な形象は、諸個人および諸集団間の相互影響からのみ、すなわち社会的接触からのみ起こる心理的な状態および行為に還元することが可能である」(ibid. 59; 訳, 164)。

社会形象を「個人」(の心理と行為)に還元しつつ分析するのが「社会学的」方法である。しかも「個人」は「社会的接触」の関数と把握されねばならない。ここで問題にされているのは、『社会分化論』の言い回しを用いれば「個人の全体に対する関係」である。

ジンメルの社会学観の骨格は『社会分化論』と同じである。新しい論文では、問題の焦点は〈社会学の第一の研究局面〉に定位されている。『社会分化論』では研究の第二の局面すなわち「個人と全体社会」の相互関係がもっぱら議論されていた。そこでの議論を受けて、相互作用の地平で社会学的認識の固有性を追究することが、新たな問題としてたち現れた。そこでキーとして選ばれたのが「社会化の形式」という概念である。私見によればジンメルの「形式」は、対象である「社会化」に内在するものではなく、人間の認識のあり方に由来する対象の構成原理と捉えるべきである。「形式社会学」の「形式」とは、対象である社会化に潜むものではなく、社会化の認識の仕方を限定する名辞である(*)。

*"Form"は、1894年の論文においてですら多義的に用いられている。「社会化の諸力、諸形式それに発展」(ibid. 57)、「(諸)形式と発展」(ibid. 55, 61; 訳, 161, 167)といったように、他の名詞と並列される

場合と、それらを一切ひとまとめにされて「社会化の形式および諸形式」(ibid. 54, 55; 訳, 160, 161)と表現される二通りが弁別されよう。私が「認識の仕方」と言っているのは後者の場合のみである。前者は経験の平面の出来事を規定する概念で、社会関係に内在する「形式」を指すものであろう。「形式」といった場合、社会学では通常前者をさすが、哲学では逆に後者を指すのが普通であらう。

社会学の第二局面で相関されるのが「個人」と「全体社会」である。第一局面で相関さるべきものとして、この論文で提案されているのは「個人」と「人々の関係形式 *Beziehungsformen*」(ibid. 58; 訳, 170)である。「個人」および「関係形式」という二次的な「統一概念」を用いて、インタラクション＝「社会化」を分析するところに社会学的认识の固有性は求められる。こうして二つの研究局面は、同一の分析原理によって貫かれることになる。こうした見方に立てば「社会化の諸形式」には、「個人化の諸形式」もまた同時に含まれていることになる(*)。

*二つの局面に共通する研究原理を、私流に定式化したのが、前節で述べた、三種の演算式(相互作用から社会へ、相互作用から個人へ、社会と個人の相同性)である。私の定式化に抵抗ある人は浜日出夫の結論の方が諸い易いかもしれない。「ジンメルにおいて『社会化』概念は『個人化』概念と一対のものであること、それゆえジンメルの社会化の社会学はじつは〈社会化＝個人化〉の社会学である」と(浜、2008: 59)。

社会学の専門化への要求は、たしかに、「社会の科学」の「空虚な一般性と抽象性」に対する批判を含んでいる。しかしジンメルによる形式社会学の提唱を、「総合」社会学的企図に対する批判にのみ求めるのは正しくない。ジンメルの論敵は「社会の科学」ではなく、「社会の科学」と「人間の科学」とを二項対立させる平面にあった。「社会主義」を克服して「個人主義」に立ち戻るのなら、19世紀の思想上の達成を無視したものといわざるをえない。返す刀で「個人主義」にも批判の矛先が向けられていたのである。

「形式」に関する以上の解釈は、1908年にまとめられた『社会学』を繙けば、そう無理でないことが分かるだろう。

「社会化の諸形式についての研究」という副題をもつこの著書において、「社会化の形式」の範

例として取り上げられているのは、「上位と下位」「闘争」といった後の社会学において社会化の「形式」として常套的に理解されているものばかりではない。「集団の量的規定」「秘密と秘密結社」「貧者」「空間と社会の空間的秩序」といったテーマにも一章を割いて立ち入った議論が行われている。ジンメルの考えている「形式」が認識方法である所以は、例えば「秘密と秘密結社」の議論をフォローすれば、良くわかると思われる。

*「秘密結社」が社会化の形式として重要なテーマであることは、「社会学の問題」の中ですでに言及されている。

「秘密」の分析は「相互作用」の水準から出立する。人々の相互関係は「お互いに何事かを知り合っている」という条件に基づいている。ジンメルはこうした「常識的」見方の逆もまた成り立つことを指摘する。お互いに対する「無知」もまた「社会化」を可能する条件であると。というのも人々は他者を絶対的意味において完全に知ることは出来ないからである。ここに「意識的に望まれた隠蔽」である「秘密」がインタラクションの一つのあり方として重要な問題として浮上してくるのである。

「隠蔽」のもっとも意識的なあり方が「虚言」である。「嘘」は他者に対する「知」のもつ重要性に依拠して成立するとすれば、「信頼」は逆に他者に対する「無知」の自覚の上に成立する。というのも「完全に知っているものは信頼する必要がないであろうし、完全に知らないものは(合理的には)決して信頼することはできない」からである(1908, GA11: 393; 訳, 上: 359)。社会とは、他者に対する知と無知との間に——いわば〈虚と実との皮膜〉の間に繰り広げられる一種独特な相互作用である。以上が個人と関係形式の相互作用を論じた社会学の〈第一局面〉である。社会学的研究は、〈第一局面〉から〈第二局面〉へと歩を進める。

「秘密」に由来する相互作用は、ある独特の人間を産み落とす。というの、秘密は「人格価値を破壊すること無しには」人々に近づくことは出来ないという感情を呼び起こし、「人格の重要性」を必須不可欠とする個人イメージを作り上げるからである(相互作用から個人へ)。

他方、「秘密」は、一種独特な社会を開示する。秘密は人々の間に深い人格的な結合を可能にし、友人関係、夫婦関係をへて「秘密結社」というユニークな形態の集団を成立させる契機となるからである（相互作用から社会へ）。

「装身具」も「文通」も、虚実皮膜の間のインタラクションに根をもつと同時に、社会化をことさらに虚実皮膜の間に誘導する、社会的事実である。それ故に、こうしたテーマに関する議論が、秘密の社会学の「補説」に組み込まれている。「装身具」も「文通」も、インタラクション平面の分析からある独特な像の「社会」（その原初形態としての「関係形式」）と「個人」とを導き出せるが故に、ジンメルにとっては「社会化の諸形式」を示す格好の手がかりを提供するのであった。

IV 完全な社会

1908年に刊行された『社会学』は、1890年に出版された初期の『社会分化論』とは異なる、中期の作品として区別され論じられるのが普通である。しかし、『社会学』を構成している10の章のうち、第1章（社会学の問題）、中間の第6章（社会圏の交差）、最後の第10章（集団の拡大と個性の発達）と、基軸をなす三つの章が『社会分化論』と同じテーマを扱っている。

とりわけ最終章「集団の拡大と個性の発達」は、きわめて重要な章である。それまでの章（例えば第5章「秘密と秘密結社」）とは異なり経験的事実に関わる一つの「命題」を証明することを目的としている。それに対してこれまでの章の目的は、社会化に関する「概念」を提示することであり、経験的事実は概念を例示するための具体的事例として用いられている。最終章では、事実の一つの命題を証明するための「証拠」として、順序正しく配置されている。「集団の拡大」と「個性の発達」という二つの項の間に、因果的な関連があることを、経験的に証明することがめざされている。最終章とそれまでの諸章は、同じ形式社会学に属する研究とはいえ、議論の焦点が異なっている。「社会化の形式」の概念ではなく、「今やここでは社会化の諸形式の間には一定の相関があ

り、相互に規定された発展の仕方があることが叙述されるはずである」（1908, GA11:791; 訳, 下:309）。

『社会分化論』と『社会学』の間には、社会学の方法と理念に関して、大きな断絶はない。「形式社会学」は、『社会分化論』で構想された社会学をドイツ語の表現として正確かつ判明に提示するための、表現上の工夫と受け取られるべきであろう。（ドイツ語を母語としていないものには逆の帰結をもたらすことが多かったが）。しかし、とはいえ、1890年から1908年への18年の間に、ジンメルの社会学の捉え方において、何の変化も発展もなかったわけではない。この間の社会学にとってもっとも意義深い出来事は1900年における『貨幣の哲学』の刊行であろう。この興味深い論考については、私はタイトル故に、立ち入って論じるつもりはない（*）。

* 〈社会的なもの〉を手がかりに「社会学」の歴史を探究するというわたくしの研究方針から、論文（著書）のタイトルに social あるいは/また sociology があるもののみが、議論の材料として用いられている。ジンメルの諸作のうちで、本稿で明示的取り上げられていないものについても、この条件を満たす限り参看する労を惜しまなかった（見落としはあるかもしれないが）。『貨幣の哲学』は、議論されている素材が社会的であることを否定するものではないが、「社会学」ではなく「哲学」というタイトル故に、私の議論の対象にされてはいない。「学」の名称は、素材（内容、認識対象）によってではなく、認識方法（形式）によって定められる、というのがジンメルの基本的立場だと見なすが故に、こうした措置はとられている。

ここでは「貨幣」という社会現象が、「集団の拡大」と「個性の発達」とは手に手をとって進化するとするジンメル年来の確信を、根本的に懐疑させたことを確認しておけば十分である。貨幣経済の発展を背景とする貨幣の浸透は、「集団の拡大」を限りなく押し進めた。貨幣にもっとも親和するのは「世界」という極限まで開放された集団である。人々の住み処が「世界」に拡大されたからといって人々の「個性」が極限まで発達するとは到底いえない。否むしろ「個性の発達」に関しては、貨幣は悲劇的な影響を与えると考えるのが普通であろう。

「貨幣」を念頭におくと、「集団の拡大」と「個性の発達」とは、自動的に随伴する二つの現象であるとは到底いい難い。しかし逆に両者がつねに対立するという「文化の悲劇」論的パースペクティブに、全面的に賛成することにも「社会学者」として躊躇せざるをえない（『貨幣の哲学』においても、第四章では「集団の拡大と個性の発達」がある種の肯定性の中で論じられている。ジンメルがこのテーゼに対する思い込みの強さを知るべきであろう）。「集団の拡大」はつねにとはいえないが、ある場合には「個性の発達」に貢献しうる。では両者が相関するため満されるべき条件は一体なにか。ジンメルは、社会と個人とを相関させるための条件を求めているうちに、『社会分論』で展開された方法論を、もう一度基礎から問い直す必要を感じた。そうした考察の成果が第一章「社会学の問題」に付け加えられている付論、「いかにして社会は可能であるかの問題についての補説」である。

『社会分化論』において、「集団の拡大」と「個性の発達」の相関性を支える方法論的根拠をもう一度おさらいしておこう。その条件を記号で表せば次の通りである。

$f W$ (相互作用) $\rightarrow G$ [社会] ……①

$f W$ (相互作用) $\rightarrow I$ [個人] ……②

G [社会] $\div I$ [個人] ……③

「社会はいかにして可能か」のテーマは、この導出式、20世紀初頭のジンメルの用語圏でいえば、「社会を可能にする『先天的な』諸条件」を再吟味することにある。社会を可能にするための「先天的な」諸条件は三つの局面に即して問い直されるはずである。

まず第一が相互作用から「社会」を導出するためのアприオリな条件（演算式①に関する問題）。

「社会化」では、人々の間にお互いの表象がズレているという事態を避けることは出来ない。人々の間にズレがあることが前提であるとすれば、相互作用から「社会」が成立することはそう容易な話しではないことになる。人々相互の食い違いにも関わらず、そこから「社会」が生成してくるのは、お互いに「類型」として認識し合い、個性的存在としての他者ではなく、類型としての

他者に即して、相互作用が方向付けられているからである。「広範な相互作用の先天的条件」は、お互いに同一の「圏の成員であるという自明の前提のもとで見る」（1908, GA: 49; 訳, 上: 45）ことである。

第二のアプリオリは相互作用からいかに「個人」が導出されるかという〈個人化〉に関わる条件である（演算式②に関わる条件）。

ジンメルによれば他者は集団の一つの要素と見なされながらも、そのうえになお何者かの存在であることは、誰でもが知っている。「私たちは、官吏について、彼がたんに官吏のみでないことを知っている」。「個人の社会化された存在の様式は、彼の社会化されない存在の様式によってもっぱらあるいは同時に規定されている」（1908, GA: 51; 訳, 上, 46）。他者に関する「類型」把握は、じつは他者をユニークな存在と見なす「個性」把握を「地」にしてはじめて浮かび上がってくる「図柄」なのである。あるいは逆に、他者を「類型」に押し込めようとするから、当てはまらないものが浮かび上がり、それが「個性」として規定される、というべきかもしれない。他者を「社会外的な＝個人的な存在」と見なすというのが、社会化に関する第二のアプリオリである。

二つのアプリオリから次のような事態が帰結する。「個人は社会化の中に包含されると同時にそれと対立もし、……、社会化のための存在であるとともに、自己のための存在である」（1908, GA: 56; 訳, 上, 51）。「社会」と「個人」の間には、根本的なズレがある。「社会」と「個人」はシメトリーなものではない。相互作用から、両者を同型の算出式によって成立させることが出来ないとすれば、『社会分化論』の仮定は否定されることになる。

ジンメルは「個人」と「社会」が根本的な食い違いを見せている場合、そこに「社会」の存在を認めない。というのは、「個人と社会的な全体との間の根本的な調和を前提として」、社会ははじめて存立することができるからである（1908, GA: 59; 訳, 上, 54）。この場合の「社会」とは「概念的な完全性の意味における」社会のことで、現実の社会を意味するものではない（1908, 59, 訳, 59）。私たちは「リングは赤い」とか「サン

タクロースは赤い服を着ている」とはいうが、実際のリングやサンタクロースの衣装の色は、ひとくちに「赤」といってもさまざまなニュアンスの色合いを示している。多種多様なものを「赤」と認定できるのは私たちに「赤」に関する「完全な」概念を持っているからである。それと同じように、相互作用の様々な形態に関して「社会」であるものとそうでないものを判別するための基準をジンメルは求めているのである。その結果至りついたのが「第三のアプリオリ」である（演算式③に関わる条件）。

相互作用から「社会」を成立させるために、最後のアプリオリが要請される。それは、個性に由来する個人的生と圏に由来する社会的生とが徹底的に相関するという仮定、内奥の個人的生によって規定された人々の特殊性が、社会という全体的生命の中で統合されるという必然性である。

社会と個人との調和を現実的に担保するものはないか。それは「職業」である（1908, GA: 60; 訳, 上, 55）。「職業」は、一方における社会の構造と過程に由来する一般性と、他方における個人の特質と衝動に由来する特殊性とが、真正面から出会い、ぶつかり合う最前線をなす。「職業」において社会と個人が調和に達するには、次のような条件が満たされていなければならない。それぞれの人格にとって社会の内部で地位と職務とが存在し、同時に、それぞれがこの地位に「召されている」という考えと、それが発見されるまで探し求めるべきであるという命令とが人々の中に存在する、——これが社会と個人とが調和するための「一般的な前提」をなす。原理的に誰でも満たしうる匿名的「職業」が、全く個人的な適性に基づく「召命」と感じ取られるとき、職業による社会と個人の宥和は完全となる。

ジンメルは、一方では「社会」と「個人」のズレを冷厳に見定めている、他方において「社会」が徹底的に社会と個人の「調和」に由来する存在であることに固執する。議論をアプリオリ論の平面に移すことによって、困難化された問題について首尾一貫した解決を与えることが出来る、とするのがジンメルの見通しである。現実の社会が完全であろうとなかろうとそれとは関わりなく、そうした社会を認識するためには、「完全な社会」

という概念はどうしても必要となる。「社会はいかにして可能か」という問いは、社会の現実的な存立条件を経験的に問うたものではない。社会という認識が成立するための論理的な条件を問いただしたものである。しかし論理と現実の平面は平行関係のままで終えることは出来ず、どこかで交差させざるを得ない。ジンメルもいう、「経験的社会が『可能』となるのは、職業概念の中で先鋭化したこの先天的条件のみによってである」と（1908, 60, 訳, 55）（*）。

* 廳茂（1995）の仕事は、私とは対極的に、「人間の科学」の理念がジンメルの生涯を貫く導きの糸であることを論証しようとしている。「理念と現実の架橋のモチーフ」というタイトルのもとに、「完全な社会」論について一章を割いて論じているのは周到な措置であろう。

「集団の拡大」と「個性の発達」とが経験的に相関するにはどのような条件が満たされるべきかについては、「完全な社会」の議論は、『社会分化論』の段階に比べて、理論的には格段の前進が見られた。少々残念なのは、この議論がまさに「補説」という位置づけにおかれていることから予想されるように、以下の諸章の中で（とりわけ最終章において）、十分に展開されることなく終わっている点である。

V ジンメルにおける〈社会的なもの〉

1917年に『社会学の根本問題（個人と社会）』が刊行される。これはジンメルの社会学の分野における最後の作品となる。「完全な社会」論が提示するパースペクティブのもとに「社会学」をもう一度編成し直したのがこの作品である。

「概念的な完全性の意味における」社会とは、これまでの言葉を使えば〈社会的なもの〉とのことである。すなわち「社会」を社会たらしめている「本質的な」契機、社会を構成しているもっとも「純粋な」要素——これ無しでは社会は成立しえないような要素——のことである。〈社会的なもの〉の内実は、「個人と社会の調和」と端的に規定することが出来る。社会学とは〈社会的なもの〉の学であるとするれば、社会と個人とがいかにして調和するかを探求するのが社会学の根本問題

ということになる。

以上の推論は、タイトルによって過不足なく裏書きされている。「社会学」の「根本問題」イコール「個人と社会（の調和）」、『貨幣の哲学』以来、ジンメルは、個人と社会の齟齬の広さと深さを痛感する一方であった。「形式社会学」の理念を提唱していた時期に比べれば、個人と社会との間に「調和」をもたらすことが如何に困難であるのかについては、痛いほど感得していた。こうした認識にもかかわらず、社会学の「根本問題」については一切変更の必要性は認めなかった。そうであるが故に社会学の根本問題の解決は一層困難になる。根本問題の難問化に直面して、社会学は以前にも増して解決能力を高めるしか生き延びる道はない。社会学の解決能力の上昇を図るために、社会学の構成に手が増えられることになった。『社会学の根本問題』の第一章「社会学の領域」で議論されているのは、社会学を三つの部門に分け、三つの部門の相互連携のなかで、「個人と社会の調和」をなんとか達成しようとする企てである。

1894年に構想された「形式社会学」は、「純粹社会学あるいは形式社会学」という名称のもとに継受される。「形式社会学」の代わりに「純粹社会学」が名称の第一に用いられている点に注意を要する。この部門は「社会化の純粹な諸形式の確定、それらの体系的な整理、それらの心理学的基礎付けと歴史的な発展」（1917, GA16: 83; 訳, 31）をもっぱら問題とする。人々の中の「相互作用」（＝「社会化」）に照準を合わせ、それを個人と社会との調和という価値関心のもとに分析することが、「純粹社会学」の課題と規定されている。

事例として「社交」が取り上げられている。「社交」は、たんに純粹社会学的研究の「個別例」を与えるだけでなく、この種の研究の「全体像のシンボルを示すであろう」（ebenda）。「全体像のシンボル」とは、〈社会的なもの〉の純粹形態を指し示すということである。〈社会的なもの〉の中核をなす「個人と社会の調和」が「社交」の場合、他者とのインタラクションに身を任せながらも、常に確保されており、しかもそのことを人々は実感することが出来る。社交では「個人」（の

個人性）は、他者に背を向けることによってではなく、他者との共存の中において感得されることが可能である。他方、「社交」において、他者とのインタラクションすなわち「社会」の忘却は、唯我独尊、尊大、無礼等々、言葉はさまざまだが、強く非難される事柄である。純粹社会学の「純粹」とは「個人と社会との調和」という〈社会的なもの〉を、直接認識対象とする、という意味であろう。「社交」の機能は、「個人と社会の調和」を人々に実感させるところにある。その意味において、それは社会化の純粹形式、社会化そのものといえるだろう。

「純粹社会学」の成果を受けて次の問題領域が開示される（*）。

*『社会分化論』の用語圏でいえば、「純粹社会学」が社会学研究の〈第一局面〉にあたり、『一般社会学』が〈第二局面〉に相当する。

「純粹社会学」の明らかにした諸概念は、それが現実化するには「内容」と一体化する必要がある。純粹社会学の概念（通常「社会化の諸形式」で意味されている）が、文化的・歴史的「内容」からどのような諸規定を受け取るか、両者の相互作用を説明するという問題領域が、次なる課題として浮かび上がってくるのである。「純粹社会学」の提示する諸概念は、「宗教的および一般文化的な諸領域の各点において」「社会的に規定されている」ありさまを確定する上で、——、「社会性 *Gesellschaftlichkeit*」によって浸透されているありさまを説明するうえで、確固たる基準点を与えてくれる（ibid. 76; 22）。様々な形態の「社会性」の中でとりわけ重要なのが「集団」である。「生活のありとあらゆる事実は、それらが実現されるのは社会集団の内部においてと、さらにまた社会集団よってである」（ibid. 79; 26）。そればかりではない。「諸個人の力の条件と諸集団の力の条件は全く異なる」（ibid. 81; 28）。ジンメルによれば、「集団」を相互作用の単位と見なし「社会化」を考察することは、学問的に許される措置である。「集団」以外にも様々な「関係形式」が存在する。そのうちの最上位のものが「(全体) 社会」であろう。「(全体) 社会」を含めて、集団および社会関係の諸形式の間の相互作用もまた社会学の固有の問題圏を構成する。個々人の集合態を

表すこうした「社会性」同士の間に成立する相互作用を考察するのが、社会学の二番目の研究部門である。この領域は「一般社会学」と呼ばれる。ジンメルは、「歴史的生活のうち、総体としての社会性を常に含むような仕方で社会的に形成されるものすべてによって形作られる問題領域」として「一般社会学」を定義する (ibid. 82; 30)。

しかしこの問題領域も「社会学」と呼ばれる限り、「個人」と全く切り離された形で考察することは許されない。「[相互作用の] 主体としての」社会は、「すでに構造として前提されて」いるにしても、あくまで「この構造から [人々の] 生活の諸事実を見て」いかねばならない。構造を所与として生活の諸事実を見た場合、そこにいかなる「一般的特徴が現れるかが問題なのである」 (ibid. 81-2; 29)。

「一般社会学」という分野は、最晩年になって、新しく構想されたものではない。「形式社会学」の理念の中に暗々裏に含まれていたものを、はっきりとした形で取り出し、それに名付けをただけである。『社会学』の最終章で試みられたことが、ここでいわれている「一般社会学」の典型をなすであろう。すなわち「歴史的な形態と形態類型との多くの多様性」のなかで、「社会化の諸形式の一定の相関関係と相互の規定された発展とを叙述する」(1908, GA11: 791; 訳, 下: 309) こと、これが一般社会学の使命である。

事例を提示するために、『社会分化論』の第四章「社会的水準」が「社会的水準と個人的水準」と改題されて再録されている。こうした事例から推測されるのは、「一般社会学」は、(完全な社会論における)「類型化」に関わる第一のアプリオリに関連をもつ、ということである。というのは、相互作用を積分して「社会」を導出するもともと容易なやり方は、諸個人の共通部分——通俗・凡庸・陳腐といった言葉によって適切に形容される——を足し合わせる方法と思われるからである。個人的水準の平準化されたものが社会的水準を表す。しかしジンメルの「社会学」理念からすると、社会的水準が個人的水準に比べて低位であると「法則」として定式化するだけでは十分ではない。経験的事例を博搜して、「個人と社会の調和」が成立するための条件を探求することこそ、

社会学の根本問題をなすからである。

とはいえ、「個人的水準と社会的水準」の乖離が、経験的事実を用いて反駁出来なかったらどうするのか。「社会的水準」を引き上げるための条件を、これまでの歴史・文化の中に発見できないとしても、「個人と社会の調和」を断念したり、忘却したりすべきではない。考察のレベルを、事実の平面から解き放ち、「個人と社会の調和」を理念として保持し続ける道が探求されてしかるべきである。

「一般社会学」も「純粹社会学」も事実の平面に関わる経験科学である。「所与の事実に対する態度は、科学の現在の段階が要求するところではあるが、最後になお社会という事実についての第三の問題領域を知らせる。これらの問題がいわば科学の上の限界と下の限界に接している限り、これらはより広い意味においてのみ社会学的と呼ばれるが、しかしその本来の性格からすれば哲学的と呼ばれてよい」(1917, GA16: 84; 訳: 32)。この第三の問題領域が「哲学的社会学」である。

「下の限界」とは社会学的研究の条件と根本概念を問い直す社会学の「認識論」を指し、「上の限界」とは社会学の知の総体を、経験によっては直接答えることの出来ない問題と概念に関連づける、社会学の「形而上学」を指す。いずれも「哲学」に属しながらもおかつ「哲学的・社会学」と呼ばれている所為は、「個人と社会の調和」を問いただすための認識論であり形而上学であるからだろう。

事例として取り上げられているのが「18世紀及び19世紀の人生観における個人と社会」である。そこでのジンメルの議論から推測できるのは、「哲学的社会学」とは、(完全な社会論における)第二のアプリオリに関連する部門である、ということである。

18世紀に生まれた「自由と平等」を求める個人主義は、カントにおける「個性」概念のうちに極点に到達した。しかし19世紀の社会主義の台頭に伴い「抽象的個人主義」が制覇することになる。19世紀の末にニーチェ等の努力により「質的個人主義」が提唱されるようになる。ジンメルの「質的個人主義」や「个性的法則」に関する議論は、カントの個性概念を継承しつつ、その現代的展開

を図った試みと位置づけられる。

現代において「社会主義」に身を寄せることは「量的個人主義」の勃興を助け、「社会の制覇」を一層促進することにつながる。「社会主義」とは対照的に、「社会学」に求められているのは「個人」の意義にコミットメントすることである。このことは、「社会主義」が興隆する以前の「個人主義」に立ち戻ることではない。「社会主義」の遺産を継承しつつ「個人」を再定立するために、「質的個人主義」という個人主義の別様の形態が彫託されたのである。「質的個人主義」の提唱は、あくまでも「個人と社会との調和」をもたらすための企てとして理解されねばならない。

ジンメルは「社会学」に固有の使命を、終生、「個人と社会の調和」の学的解明のなかに一貫して求めていた。『社会分化論』の段階では、この調和は進化論的な歴史発展の中で「経験的事実」として確立されると信じていた節がある。しかし『社会学の根本問題』の段階になると、それが経験的事実としては容易に達成しえないことは十分承知されている。それ故に、「哲学的」考察を武器として、「個人と社会の調和」を事実性の忘却のなかから救い出し、「理念」として保持するための途もまた、社会学の中に内蔵されることになったのである。

ジンメルの場合、おのれの個性は、ベルリンを地盤としてはじめて花開くことが可能になったという思いを、終生、もつことが出来たように思える。ベルリンという世界都市は、ジンメルの私的な思いのなかでは、「個人と社会の調和」が上演される舞台であり続けた。「社会学」を「幾何学」に喩えるメタファーが終生変わることなく用いられていた。「幾何学」によって、「世界都市ベルリン」が表象されたとき、その意味はもっとも生き生きと理解されるだろう。それはちょうど、モンドリアンの晩年の代表作「ブロードウェイ・ブギウギ」を通して、彼のニューヨークにおける生活体験を生き生きと感得することが出来るように。モンドリアンが一枚のタブローとして描き出したかったのは、大都会の生活経験全体である。描き出そうとされた対象から言えば、「ブロードウェイ・ブギウギ」の造形は十分具象的である。具象

か抽象かの線引きは、描出が志向される世界に依存する。社会学を「幾何学」になぞることによって、「世界都市ベルリン」に関して、「内容」ある具象画ではなく「形式」よりなる抽象画の造形が求められているわけではない。ジンメルの生活体験のなかでは、「世界都市ベルリン」は「幾何学」によって、その本質がもっとも生き生きと表現されるからである。ちょうど垂直線と水平線、あるいはまた原色の正方形や長方形の配置（コンポジション）を通して、私たちはニューヨークの都市生活を生き生きとイメージに浮かべることが出来るように。ジンメルの社会学的想像力の源泉は「ベルリン」にあった。

ジンメルにとって「社会学」とは、思想の冒険の中で脅かされたアイデンティティの根を確認するために立ち戻るべき原点であった。それ故、間欠的な形にしる、かれは「社会学者」であり続ける道を選んだと思われる。

補説 〈職業の社会学〉による例示

完全な社会論によれば、「職業」カテゴリーは近代において個人と社会の調和が成立するために——第三のアプリオリとして——もっとも重要な要素である。「職業」の社会学的研究が三部門構成をとることにより、〈社会的なもの〉の復権が、本当に可能になるのだろうか。補説を設けてこのことを吟味することにしよう。以下の議論は、ジンメル自身の中に対応する記述は存在しない。私の意図としては、『社会学の根本問題』に関する私の議論から当必然的な形で、ジンメルの断片的な記述を用いて「可能世界」を構築することにある。

1、職業の純粹社会学

職業活動がインタラクション（社会化）の平面で、微細に分析されることになるだろう、その際次の三つの点が、議論の焦点となるだろう。まず、職業を遂行する上でいかなる「類型化」が行われているか、次に、職業生活がひとびとの「個人化」に如何に貢献するものであるか、最後に「類型化」と「個人化」という対極的過程が人々にもたらす乖離・ギャップを極少化するために、いかなる媒介メカニズムが存在するのか、といった

問題群の解明が重要となるだろう。

2、職業の一般社会学

職業の「類型化」、「個人化」、両者の媒介メカニズムについて、歴史的事実や比較社会論的事実を駆使して、相互の相関関係や発展傾向が論じられる。たとえば「古代においては、個人的な分化と分業的に編成された社会」が存在しなかったので、職業のなかで「個人と社会の調和」といった事柄が問題にされることはなかった、といったたぐいの事柄（訳、上、55）を解明するのは、一般社会学に固有の問題であろう。

3、職業の哲学的社会学

この部門における最大のテーマが「召命としての職業」の問題である。職業が「内的な召命」になるとは、いったいどのような意味なのか、こうした「召命としての職業」がこれまで存在したことがあるのか、その典型的な形態はどのような経緯で歴史的に存在するようになったのか、そうした観念はいまや「どこからどこへ」移行行こうとしているのか、等々が議論されるべき問題群であろう。

以上のような三方向からの異なった考察により、「職業」カテゴリーの中で、個人と社会の調和という問題が、事実性の中で忘れ去られることなく、先鋭な形で意識化されることになる。こうした先鋭化された意識のなかで、職業生活の現実に関する批判的検討は押し進められ、「個人と社会の調和」が実現される方向で現実の再構築が図られることになるだろう。職業の社会学的研究は、このようにして、〈社会的なもの〉の復権に役立つはずである。

追記.「社会的なものの興亡（その2）」は「階級の在り処としての社会的なもの」というタイトルで、次号紀要に掲載される予定である。

引用文献

- 廳茂、1995、『ジンメルにおける人間の科学』木鐸社。
 居安正、2000、『ゲオルグ・ジンメル：現代分化社会における個人と社会』東信堂。
 浜日出夫、2008、「ジンメルの〈社会化＝個人化〉の社会学」『社会学史研究』第30号、59～72ページ、日本社会学史学会編。
 Simmel, Georg, 1890, Über sociale Differenzierung: Sociologische und psychologische Untersuchungen, →Gesamtausgabe Bd. 2, Suhrkamp Taschenbuch, (居安正訳「社会分化論——社会学的・心理学的研究」『ジンメル社会分化論・社会学』[現代社会学大系1] 1970年、青木書店)。
 —1894, “Das Problem der Sociologie”→Gesamtausgabe Bd. 5, Suhrkamp Taschenbuch (阿閉吉男訳「社会学の問題」『社会学の根本問題』(現代教養文庫S8) 1966年、社会思想社)。
 —1908, Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung→Gesamtausgabe Bd. 11, Suhrkamp Taschenbuch (居安正訳『ジンメル社会学 上・下』白水社、1994年)。
 —1917, Grundfragen der Soziologie (Individuum und Gesellschaft)→Gesamtausgabe Bd. 16, Suhrkamp Taschenbuch (居安正訳『社会学の根本問題(個人と社会)』2004年、世界思想社。清水幾太郎訳『社会学の根本問題—個人と社会—』1979年、岩波書店(岩波文庫)。
 田中拓道、2006、『貧困と共和国：社会的連帯の誕生』人文書院。

Simmel and “Individual–Society Problem”

ABSTRACT

Georg Simmel held the same views about sociology all his life, though they were expressed in slightly different ways in different periods.

1 . Period of *Über Sociale Differenzierung* [*On Social Differentiation*]

Both “individual” and “society” are merely nominal as sociological terms, and only interactions actually exist. Sociology aims to explore the correlation between “individual” and “society,” both of which are concepts that have been secondarily constructed from such interactions. Sociology clarifies the correlativity between the expansion of groups and the development of individuality.

2 . Period of “Das Problem der Sociologie [*The Problem of Sociology*]”

Other social sciences can also designate the interaction between individuals, or *Vergesellschaftung* as a recognition target. The key concept of “Formen der *Vergesellschaftung*” has been proposed to classify the sociology-specific targets.

3 . Period of *Soziologie* [*Sociology*]

Facing the expansion of groups does not necessarily imply the development of individuality; in fact, the “form” is reconstructed as “a priori” of social recognition. The harmony between individuals and society is redefined as “a priori” that maintains the integrity of the concept of society instead of an actual society.

4 . Period of *Grundfragen der Soziologie* [*Fundamental Questions of Sociology*]

The sociological approach has been promoted as an amalgamation of three spheres to achieve harmony between society and individuals. Pure sociology studies the interaction as such first; subsequently general sociology empirically investigates the correlation between individuals and society; finally philosophical sociology explores the correlativity between individuals and society at a philosophical level. The fundamental questions of sociology lie in the pursuit of the correlation between individuals and society in defiance of the reality in which harmony between society and individuals has not been realized.

Key Words: interaction, construction of individual, construction of society.